

かつての人は狩りや食料採集、薪集めのために山に入り、娯楽としての登山という概念はなかった。谷川岳（たにがわだけ）は神の宿る場所、霊山として崇められていたため、人々が気軽に入れるような場所ではなかったのだ。

明治時代（1868～1912）になると、英国から日本に登山スポーツが伝えられたが、それがみなかみに伝わったのは1920年代になってからのことだった。谷川岳の初縦走は1920年7月2日となっている。藤島敏男（ふじしまとしお）（1896～1976）と森喬（もりたかし）（1896～1989）の日本人登山家2名が、修験者や猟師が使用していた土樽（つちたる）から谷川温泉（たにがわおんせん）の町までの山道を辿ったのである。この登頂は登山家たちの注目を集めたが、谷川岳が有名になったのは、登山家・大島亮吉（おおしまりょうきち）（1899～1928）が「近くて良い山」として賞賛してからのことであつた。

1931年の上越（じょうえつ）線の開通によって、東京の登山家たちは谷川岳にアクセスしやすくなった。しかし、愛好家の人気が高まるにつれて事故の数も増えたため、谷川岳は世界有数の危険な山としてとらえられるようになった。1966年には、登山者37人が亡くなったことをきっかけに、安全予防策の不備に対する強い抗議が巻き起こった。1967年に谷川岳遭難防止条例の施行により、安全登山への指導も強化され、死亡者数は徐々に減少傾向が見られるようになった。